

脳内の神経活動と「知覚の選言説」

横山 幹子(Yokoyama Mikiko)

筑波大学図書館情報メディア系

知覚についてのわれわれの日常的な考えを維持することを議論の前提とした場合、知覚についてどのような説明を与えることが適切なかの検討の一端を担うことが本論の目的である。

「知覚についてのわれわれの日常的な考え」としてまず考えられるのは、「知覚の対象は心から独立した対象である（知覚的経験の現象的特徴は心から独立した対象に依存している）」という考えである。しかし、その考えに問題があるのではないかということが、いわゆる「幻覚からの議論」によって論じられる。そして、「幻覚からの議論」に答えようとして、たとえば、表象説や選言説と言った知覚についての説が提案されている。表象説と選言説は、どのような形而上学的前提を認めているかにおいて異なる一方で、どちらも、「知覚の対象は心から独立した対象である」ということを認めうるような、幻覚的経験の説明をしており、その点においては優劣をつけることができない。

しかし、「知覚についてのわれわれの日常的な考え」として考えられるのは、「知覚の対象は心から独立した対象である」ということだけではない。たとえば、X線 CT (X線コンピュータ断層撮影法) や MRI (磁気共鳴画像法)、PET (陽電子放出断層撮影法)、fMRI (機能的磁気共鳴画像法) 等の技術が開発され、生きている人の脳を可視化できるようになったこと (村上郁也, イラストレクチャー認知神経科学: 心理学と脳科学が解くこころの仕組み, オーム社, 2010.) により、われわれは、日常的にも、ますます、脳内の神経活動が知覚と結びついていると考えるようになっていく。また、幻覚的経験に対応するような脳内の神経活動があるという考えも一般的である。それらの考えは、表象説と親和性が高いように思われるが、選言説はその考えをどのように説明することができるのだろうか。

本論では、「脳内の神経活動が知覚と結びついている」という考えや「幻覚的経験に対応するような脳内の神経活動がある」という考えと知覚の選言説の関わりを検討することによって、「知覚についてのわれわれの日常的な考え」を維持することのできる知覚の理論として選言説が適切であるかどうかを検討する。

(本研究は、JSPS 科研費 25370005 の助成を受けたものです。)